

中村1号墳

2004年3月

島根県平田市教育委員会

例　言

- 1 本書は平田市教育委員会が平成14年度と平成15年度に国庫補助事業として実施した、中村1号墳の発掘調査の概要報告書である。
- 2 調査地は平田市国富町1948-2番地、他である。
- 3 調査にあたっては土地所有者の皆様を初め、近隣住民の皆様、中村自治会の皆様のご協力をいただいた。
- 4 挿図中の方位は磁北を示す。標高は海拔高である。
- 5 地形測量にあたって設置した杭には国土座標（世界測地系）を取り付けている。
- 6 第7図の家形石棺復元図は、角田徳幸氏が作成された図を、使わせていただいた。
- 7 図版1から8までは、松尾充晶氏による撮影である。
- 8 工事着手前の写真は、曾田工務店から提供していただいた。
- 9 出土遺物及び実測図、写真は平田市教育委員会で保管している。
- 10 本書の執筆、編集は、原が行った。

I 調査に至る経緯と経過

平成14年度（1次調査）

平成14年5月2日の午後、平田市国富町の丹堀川で砂防工事のための工事用の進入道路を建設中の業者から、横穴らしいものを発見したとの連絡が島根県出雲土木建築事務所の工務2課に入った。工務2課から市建設課、市建設課から生涯学習課に連絡があり、直ちに3者で現地を確認することとなった。

現地では、開口部である石室天井から横穴式石室の内部に入り様子を観察するとともに、業者から状況説明を受けた。古墳は未盗掘古墳の可能性が高いこと、横穴式石室の規模が大きいことなどから、工事を一時中断し、開口部には鉄板とシートで塞ぐこととした。

その後、島根県土木部砂防課・島根県教育庁文化財課・出雲土木建築事務所工務2課・平田市教育委員会生涯学習課の4者協議や地元説明などを経て、工事用の進入道路はルートを変更することとなった。

今まで封鎖されていた石室が開口したことにより、前室の大刀などの腐食が進行するおそれや、古墳の基礎資料を得るために最低限の調査が必要との調査指導により、国庫補助事業により調査を実施する事とした。

調査は6月7日から落石した天井石の除去から始め、地形測量、前室の大刀取り上げ、石室実測などを行い、10月31日に現地調査を終了した。

調査体制

調査主体 平田市教育委員会（教育長 渡部邦男）

事務局 生涯学習課長 西尾 真

生涯学習係長 長畠 級

調査員 主任 原 俊二

調査補助員 主事 多久和晋

調査指導 島根大学法文学部 教授 渡辺貞幸

島根県立松江北高等学校 教諭 大谷晃二

島根県教育委員会 文化財課 広江耕史 池瀬俊一 伊藤徳広

島根県埋蔵文化財調査センター ト部吉博 内田 融 植 真治 角田徳幸

林 健亮 松尾充晶 沢田正明

調査協力 出雲土木建築事務所工務2課・平田市建設課・曾田工務店

平成15年度（2次調査）

今年度は古墳の形や規模などを確認するために、埴丘調査を行うこととした。9月26日から伐採を開始し、測量杭の設置、地形測量の後、10月28日からトレンチによる調査を開始した。当初は数十センチで地山まで達すると考えていたが、予想に反し2m近くまで掘り下げる結果となった。このため調査期間を延長して1月31日まで現地調査を行った。その後、報告書の作成に入った。

調査主体 平田市教育委員会（教育長 渡部邦男）

事務局 生涯学習課長 西尾 真（4月～5月）

秋国英雄（5月～3月）

生涯学習係長 長嶋 敏
調査員 副係長（5月～3月） 原 俊二
調査指導 烏根大学法文学部 教授 渡辺貞幸
島根県立松江北高等学校 教諭 大谷晃二
三瓶フィールドミュージアム 指導員 中村唯史
島根県教育委員会 文化財課 広江耕史 原田敏照 伊藤徳広
調査協力 出雲市芸術文化振興課 坂本豊治
大社町教育委員会 景山真二
出雲市木建築事務所工務2課・平田市建設課・曾田工務店
作業員 桑原孝栄、桑原郁郎、桑原満雄、桑原 進
整理作業員（トレース） 堀江五十鈴

II 調査の概要

1 墳丘について

墳形については、円墳と前方後円墳の両方の可能性が指摘されていたため、5本のトレンチを設定して墳丘確認を行った。いずれのトレンチも上層は丹堀川の後世の氾濫により堆積したもので、墳丘もかなり影響を受けていることが判明した。また、一般的に言う固い地山は確認できなかった。

第1トレンチ

前方部の存在を確認するために設定したトレンチで、長さ10m、幅1mである。

第2層は丹堀川の氾濫による堆積であり、第3層は遺物包含層で須恵器や土師器の小片が出土している。このトレンチからは古墳の墳丘や古墳に伴う遺物は発見できなかった。

第2トレンチ

前方部の存在を確認するために設定したトレンチで、長さ5m、幅1mである。

第2層は丹堀川の氾濫による堆積である。第3層は溝である。第4層は遺物包含層で須恵器や土師器の小片が出土している。このトレンチからは古墳の墳丘や古墳に伴う遺物は発見できなかった。

第3トレンチ

後円部の規模と墳丘の構造を確認するために設定したトレンチである。玄室主軸に直交し、玄室中心から5mの地点を基点とし、長さ5m、幅1mのトレンチを設定した。

標高16.5m付近の第18・19・20・21層を墳丘の基盤層として、第7-1・12・13層のほぼ水平で互層状になった層と第7-3・7-4層も古墳の墳丘と判断した。これらの上層にも互層状の層が堆積しているが、いずれも洪水などで墳丘の一部が削られ再堆積したものと判断した。

これらのことから玄室中心から8m付近を墳丘端と考えたい。

第4トレンチ

後円部の規模と墳丘の構造を確認するために設定したトレンチである。玄室主軸を基準に、入口方向から北に40度振り、玄室中心から5mの地点を基点とし、長さ5m、幅1mのトレンチを設定した。

標高16.8m付近の第19-1・19-2・20層を墳丘の基盤層として、第11から18層までのほぼ水平で互層状になった層を墳丘と判断した。これらのことから玄室中心から8m付近を墳丘端と考えたい。

第5トレンチ

後円部の規模と墳丘の構造並びに後方部の存在を確認するために設定したトレンチである。玄室主軸を基準に、入口方向から南に40度振り、玄室中心から5mの地点を基点とし、長さ5m、幅1mのトレンチを設定した。最終的には第2トレンチにつなげたため、長さ10.5mのトレンチとなった。

標高16.5m付近の第19層を墳丘の基盤層として、第16層と第17層の8.3m付近までの水平で互層状になった層と細かな単位で互層状になった層を古墳の墳丘と判断した。これらの上層や外側にも互層状の層が堆積しているが、これらは墳丘流出や崩壊などによる再堆積したものと判断した。これらのことから玄室中心から8.3m付近を墳丘端と考えたい。

2 横穴式石室について

石室は墳丘の西側に開口し、玄室、前室と羨道からなる複室構造である。流入土を除去していないため、計測は流入土上面などによるものである。

石室の規模は全長7.4m以上で、玄室は左側壁で長さ3.3m以上、幅1.8m以上、高さ1.75m以上。前室は左側壁で長さ2.58m以上、幅は玄門側で1.28m以上、前門側で1.06m以上、高さ1.53m以上。羨道は右側壁で長さ0.87m以上で、いずれも横幅に比べて奥行きが長い。

① 玄室

玄室の奥壁は2枚の切石を用い、天井近くは小型な石材で調整を行っている。奥壁の1段目には切組積みを行っている。右側壁は3段で構成し、天井近くは小型な石材で調整を行っている。1段目の腰石は長さ3.0m以上の1枚石を用いている。左側壁は3段で構成し、天井近くは小型な石材で調整を行っている。1段目の腰石は長さ3.3m以上の1枚石を用いている。2段目前側の石材は玄門のまぐき石を受けるためにL字上に切り取られている。天井石は2枚で構成されている。高さは1.75m以上である。

平面形は長方形だが、左側壁が右側壁に比べ30cm長いため、台形状となっている。

家形石棺

玄室の左側壁に沿って、長さ2.05m、幅0.9m、高さ0.46m以上の横口式の組合せ式家形石棺が1基ある。

奥板の前に両側板を立て、その上に蓋石がのる。左側板の外面はやや膨らみを持ち、両側板の内側はくり込みが施されている。蓋は3枚に割れていたため、計測が難しいが、長さ約1.68m、幅0.86mで、高さは中央部で13cm、端で8cmである。上面には、わずかに棟が認められるが、下面は平坦である。

側板の正面、28cm前には灯明台石がある。長さ20cm、幅18cm、高さ8cm以上で、平面形は丸みを帯びた六角形で、上面は浅く窪んでいる。

副葬品

流入土上面に表れているもののみであるが、数点確認できる。

家形石棺の奥板上面には須恵器の短頸壺が1点ある。正面には須恵器のかめ1点と器形不明品が1点ある。右の側板と玄室奥壁の間には立てかけられた状態で大刀の柄が1点ある。

左の側板と玄門との間には須恵器のかめが2点ある。この部分は天井石が落ちた場所である。1点は割れ口も新しく破片が接合することから玄室内の副葬品と考えられるが、もう1点は割れ口も古く他に破片もないことから、玄室内の副葬品かどうか不明である。

② 玄門

両袖式である。右の袖石は高さ1.30m以上、幅0.67m、左の袖石は高さ1.14m以上、幅0.47mで、ともに側壁に組み込ませて立て、玄室側に傾けて設置している。樋石は長さ0.86m、幅1.7m以上、高さ0.95m以上である。袖石は右側と左側とでは長さが異なるが、これは玄室の両側壁の長さが違うことからくる、長さ調整のためのものと考えられる。

③ 前室

玄室の石材に比べ小型の石材を用いている。切組積みは認められない。右側壁は長さ2.38m以上で、5段ないし7段で構成している。左側壁は長さ2.58m以上で、4段ないし6段で構成している。天井石は3枚で構成されている。高さは1.54m以上である。

平面形は細長い台形だが、左側壁が右側壁に比べ20cm長いため、幾分、変形している。

石障

長さ0.76m以上、幅6cm以上、高さ39cm以上の石障が、玄門手前約0.5mの場所に、石室の主軸に直交するかたちで設けられている。側面からの形は、上面が弧を描き、角は面取りを施されており、丁寧な作りである。

副葬品

石障と玄門との間に、銀装の大刀1点が玄門に立てかけられていた。

④ 前門

両袖式である。右の袖石は高さ0.4m以上、幅0.38m以上、左の袖石は高さ0.4m以上、幅0.37m以上で、ともに側壁に組み込ませて立てている。左袖石の上面から下に約30cm、流入土と接する部分に割り込み状の加工と思われる跡が認められる。樋石は長さ0.65m以上、幅0.8m以上、高さ0.5m以上である。

⑤ 羨門・羨道

流入上のため詳細は不明である。右側壁は1石、左側壁は2石が確認できる。羨門の樋石と思われる石が確認できる。

3 前室の発掘調査

銀装の大刀を取り上げるために、石障と玄門の間の50cm×30cmの範囲を、階段状に深さ約25cmまで掘り下がった。

大刀は切っ先を下に、刃部を側壁側に向けて立った状態で副葬されていた。玄門の袖石に立てかけられていたと思われるが、発見時には袖石から0.6cmあまり隙間があいていた。柄頭は発見できず、銀線はほどけ垂れ下がっていた。切っ先は石障の底部分にまで達している。

大刀の周りからは須恵器と鉄鎌が出土した。須恵器は通常の环身が3個、坏蓋が4個以上あり、その他に装飾楕が1個、副葬されていた。鉄鎌は、刃部を下にして立てた状態で副葬されていた。折れたため、破片を2個体分取り上げたが、いずれも茎付近の破片である。

床の高さはこの大刀と周辺の遺物出土状況から、標高約16m付近に前室の床が存在すると想定される。また、床には床石が敷かれていると考えられる。

III 出土遺物

大 刀

現存長は80.8cmである。

刀身の長さは約77.1cmである。関は両関で、切先はカマス切先である。

柄頭は見つかっていない。大刀全体の格からすると、主頭の柄頭が想定できるが、銀線がほどける時に落下した可能性や、木製の柄頭とも考えられる。

柄は、長さ11.2cmで、目釘は1カ所である。銀線を巻いているが、鍔寄りに銀線が一巻き残っているほかは、ほどけて垂れ下がった状態である。木質部が依存している部分の痕跡から、銀線は密に巻かれてはおらず、間隔をあけて巻かれていたようである。銀線の現存長は約49cmで、幅は1.5mmである。表面に刻み目はなく、ゆるやかな稜が付く。裏面は平坦である。

鍔は、突出鍔で、長径3.8cm、幅0.7cmである。

鞘は、長さ約2.6cmである。

鞘は、長さ69.0cmである。鞘口金具は銅製で、長さ4.2cm、長径3.3cm、短径1.7cmを測る。佩用金具は、鍔付足金物で元は鞘口金具の端に接して取り付けられていたと思われる。鞘尻から約6.5cmのところに責金具が付く。

IV まとめ

今回の中村1号墳は、平田市内では最大級の古墳であるとともに未盗掘古墳のため、性急な調査は行わざ、古墳の概要を把握するために最低限の調査を2カ年で実施した。

古墳は、丹堀川によって出来た谷の出口部分の扇状地上に占地する。そのため、堅い地山ではなく川の堆積物層の上に墳丘が築かれている。さらに、墳丘上には堆積物が厚く堆積しているため、現在の地形は古墳の形を反映していないことが判明した。

墳形については、現状の地形から円墳あるいは前方後円墳の可能性が考えられていたが、第1・第2・第5トレンチにより、後方部が存在する可能性は低くなり、円墳と判断する事が出来た。さらに、墳丘の規模については、第3・第4・第5トレンチから玄室の中心を墳丘の中心と仮定した場合、半径約8m、直径約16m、高さ2m以上の円墳と想定する事が出来た。外部施設としての埴輪や葺石は、丹堀川の氾濫などで墳丘が損傷を受けているため確認することが出来なく、本来の状況は不明である。

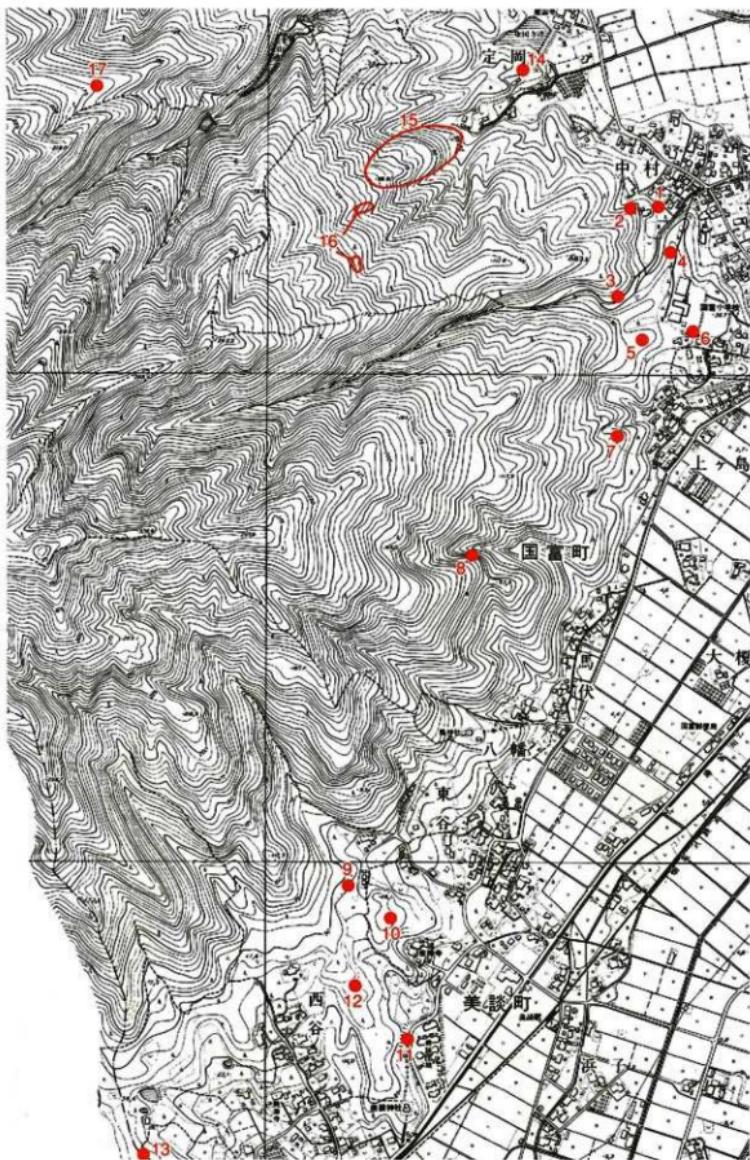
横穴式石室は切石、切組み積みの複室構造である。石室の入口は、平野部側ではなく山側である西側に開口する。石室の構築は、墳丘築造基底面より1段掘り下げたところから始めていると考えられる。奥壁、側壁は、袖石の高さまでに2段階、その上に1段階の合計3段階で構築し、4段階目で天井石を高架するものと考えられる。副葬品は、玄室では大刀、須恵器などが確認でき、前室では銀装の大刀、鐵鎌、須恵器などが確認できた。このうち、取り上げた遺物は銀装の大刀、鐵鎌片、須恵器の壺片である。ごく一部を発掘した状況から推定すると、流入土の下には豊富な副葬品があるものと考えられる。

古墳の時期は、石室の平面形、側壁、奥壁の構成と石材の加工の具合から6世紀中葉頃が想定でき、市内の山根垣古墳や出雲市の上塙冶築山古墳に近い時期が考えられる。

中村1号墳は、墳丘や横穴式石室の規模、石室の作り、副葬品の内容などから判断して、大首長墳に次ぐ有力首長の古墳と考えられる。また、未盗掘墳のため、当時の葬送儀礼や被葬者像などを明らかにしていく上で貴重な資料を提供するものと考えられる。これらのことから、この古墳は平田市のみならず出雲西部あるいは出雲地域全体の中で評価し、歴史的位置づけをされるべきものと考える。

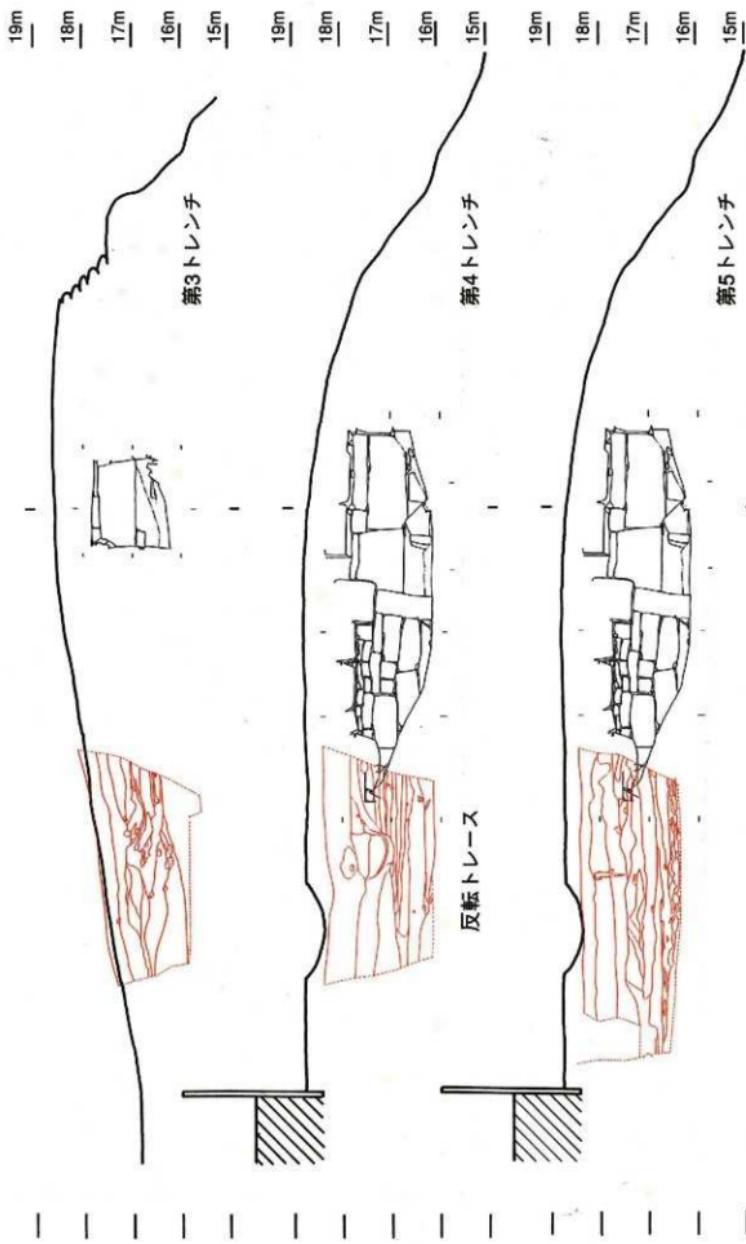
工事中の発見であったが、関係機関や地元の理解、協力のもとに、2カ年に渡って調査を実施することが出来た。今後、この古墳の保存、活用などの取り扱いについては、地元並びに関係機関と十分協議しながら進めて行く必要があると考える。

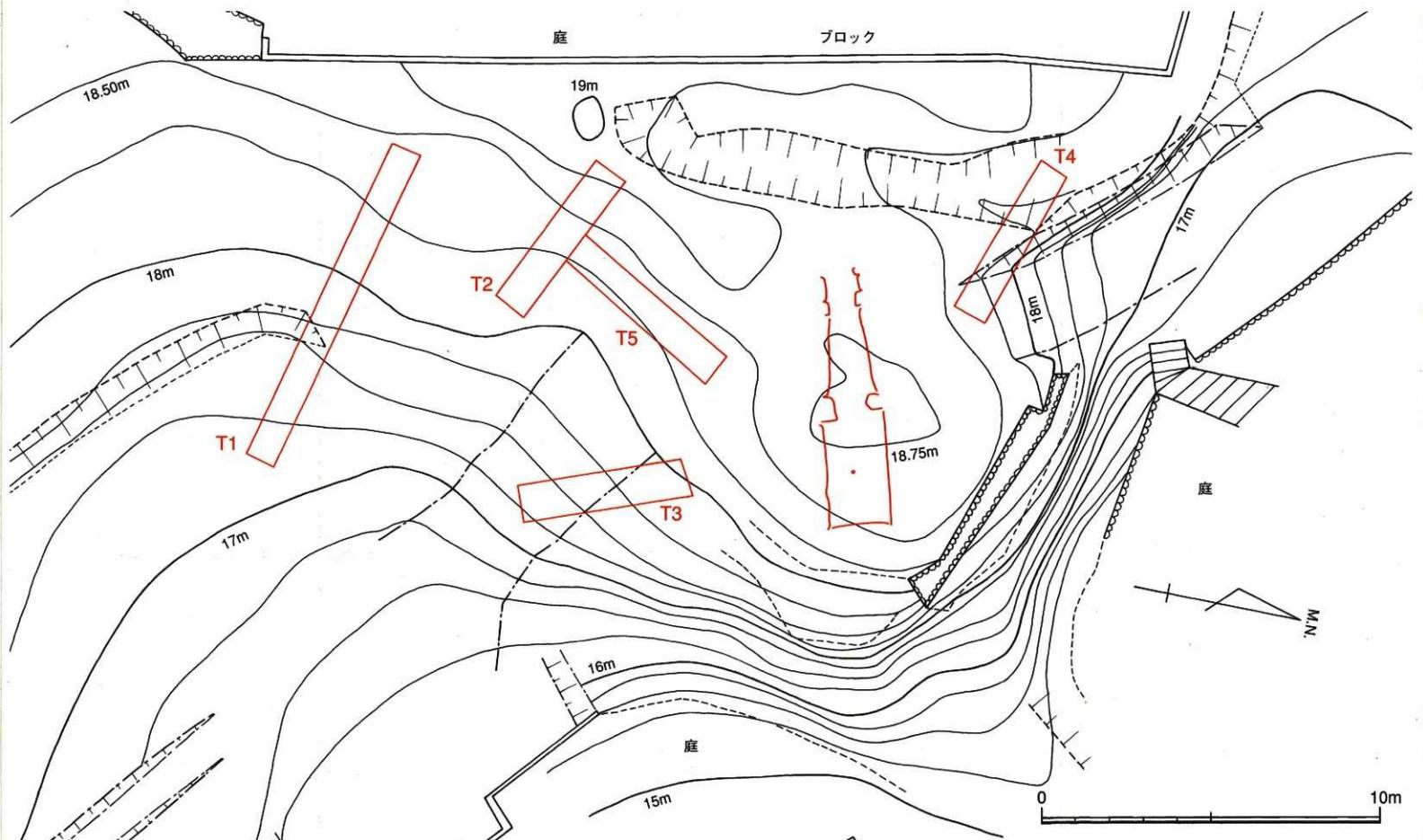
- 1 中村1号墳
- 2 中村2号墳
- 3 中村横穴
- 4 山辺神社古墳
- 5 国富小学校裏古墳
- 6 中屋荒神古墳
- 7 上島古墳
- 8 惣ヶ谷横穴群
- 9 差指見谷1号墳
- 10 寺山古墳
- 11 美談神社2号墳
- 12 美談神社1号墳
- 13 大寺古墳
- 14 若松神社跡の上の古墳
- 15 定岡谷古墳群
- 16 定岡谷上横穴群
- 17 左皿谷奥古墳



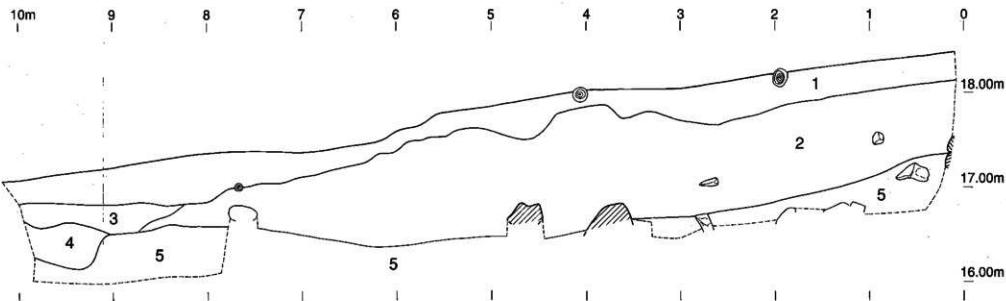
第1図 中村1号墻と周辺の古墻 (S=1/10,000)

第2図 墓丘断面と墓3・4・5トレンチ位置模式図 (1 / 100)

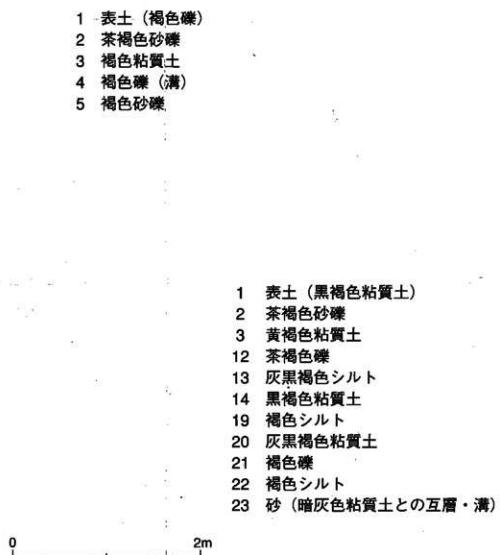




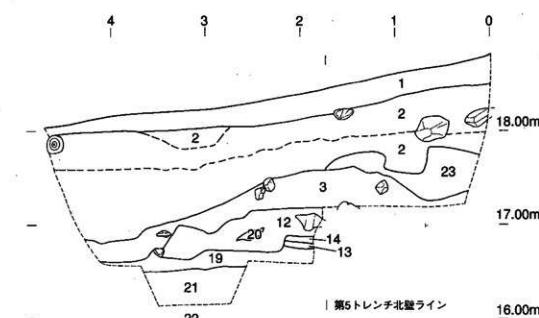
第3図 填丘測量図とトレーンチ配置図 (S=1/100)



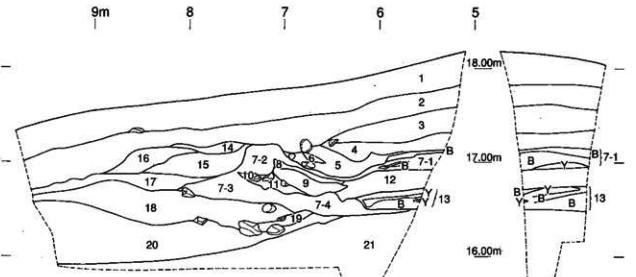
第1トレンチ（南壁）



第2トレンチ（南壁）

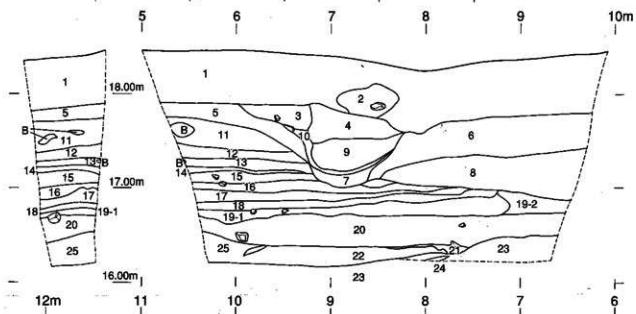


第4図 第1トレンチ、第2トレンチ 土層図 (S=1/40)



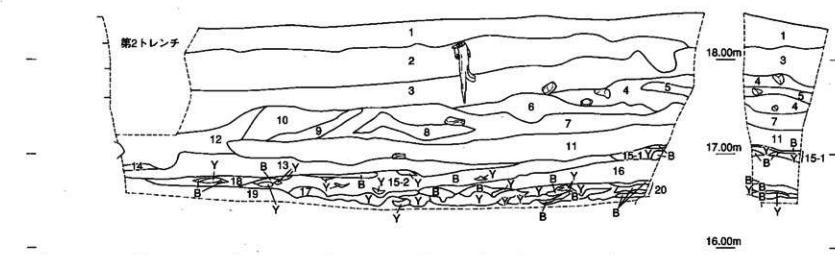
第3トレンチ（西壁・北壁）

- 1 表土（茶褐色礫）
- 2 棕褐色粘質土
- 3 茶褐色礫
- 4 黑褐色礫
- 5 茶褐色礫
- 6 黄色粘質土
- 7 黑褐色粘質土
- 1 黒色土が帯状にはいる
- 2 一部、黄色粘土がブロック状にはいる
- 3 一部、黒色粘土がブロック状にはいる
- 4 一部、赤褐色の礫がブロック状にはいる
- 8 茶褐色礫
- 9 黑色粘質土
- 10 黄色粘質土
- 11 茶褐色礫
- 12 棕褐色粘質土
- 13 黑色粘質土



第4トレンチ（西壁・南壁）

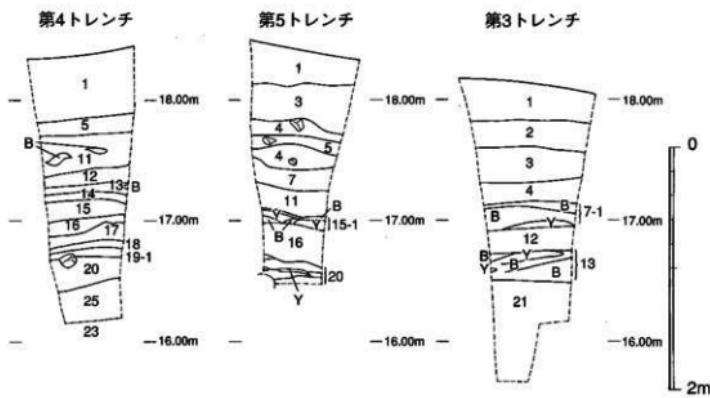
- 1 表土（茶褐色礫）
- 2 茶褐色礫
- 3 茶褐色礫
- 4 茶褐色礫
- 5 暗茶褐色粘質土
- 6 暗茶褐色粘質土
- 7 暗茶褐色粘質土
- 8 茶褐色粘質土
- 9 茶褐色砂礫
- 10 茶褐色砂
- 11 暗黄色粘質土
- 12 赤黄色粘質土
- 13 暗褐色粘質土
- 14 黑色粘質土
- 15 黄色粘質土
- 16 赤色粘質土
- 17 黄色粘質土
- 18 黑色粘質土
- 19-1 白黄色粘質土
- 19-2 橙色粘質土
- 20 黑色粘質土
- 21 黑色粘質土
- 22 暗黄色粘質土
- 23 黑褐色粘質土
- 24 黄色粘質土
- 25 暗白色粘質土
- B 黑色粘質土



第5トレンチ（北壁・東壁）

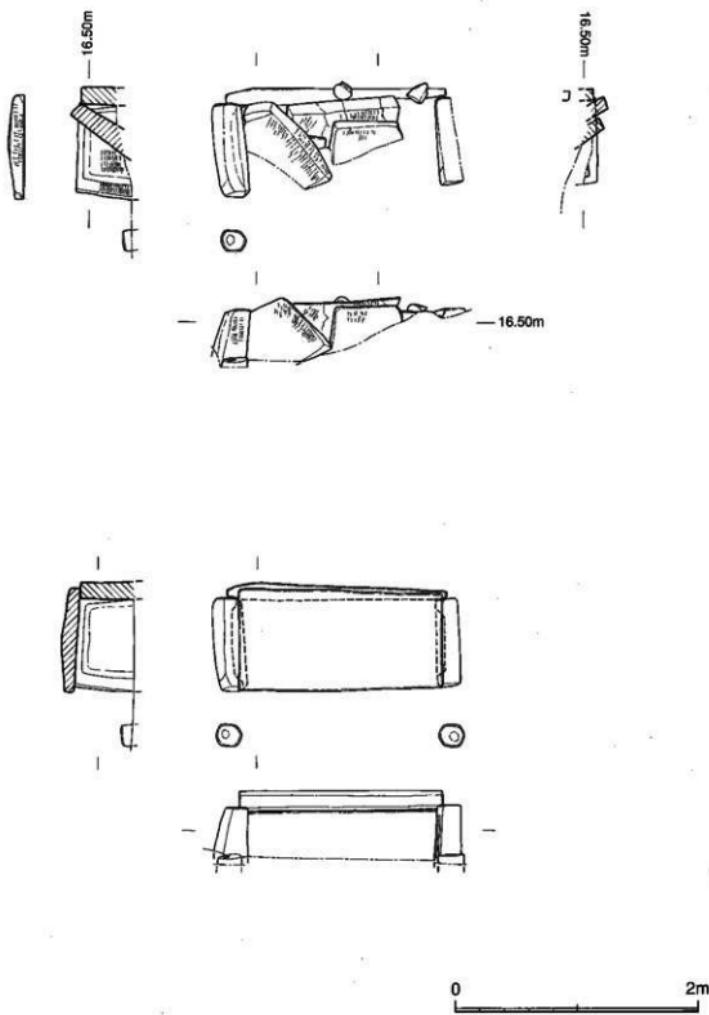
- 1 表土（黒褐色粘質土）
- 2 茶褐色砂礫
- 3 黄褐色粘質土
- 4 黄褐色礫
- 5 黑褐色粘質土
- 6 黄褐色礫
- 7 茶褐色礫
- 8 黑褐色粘質土
- 9 黑褐色粘質土
- 10 茶褐色礫
- 11 暗褐色粘質土
- 12 茶褐色礫
- 13 灰黑褐色シルト
- 14 黑褐色粘質土
- 15-1 黑色粘質土 (B 黑色粘質土, Y 黄色粘質土)
- 15-2 灰黑色粘質土
- 16 黄色粘質土
- 17 黄色粘質土
- 18 黑褐色シルト
- 19 褐色シルト
- 20 B 黑色粘質土
- Y 黄色粘質土

第5図 第3トレンチ、第4トレンチ、第5トレンチ 土層図 (S=1/40)

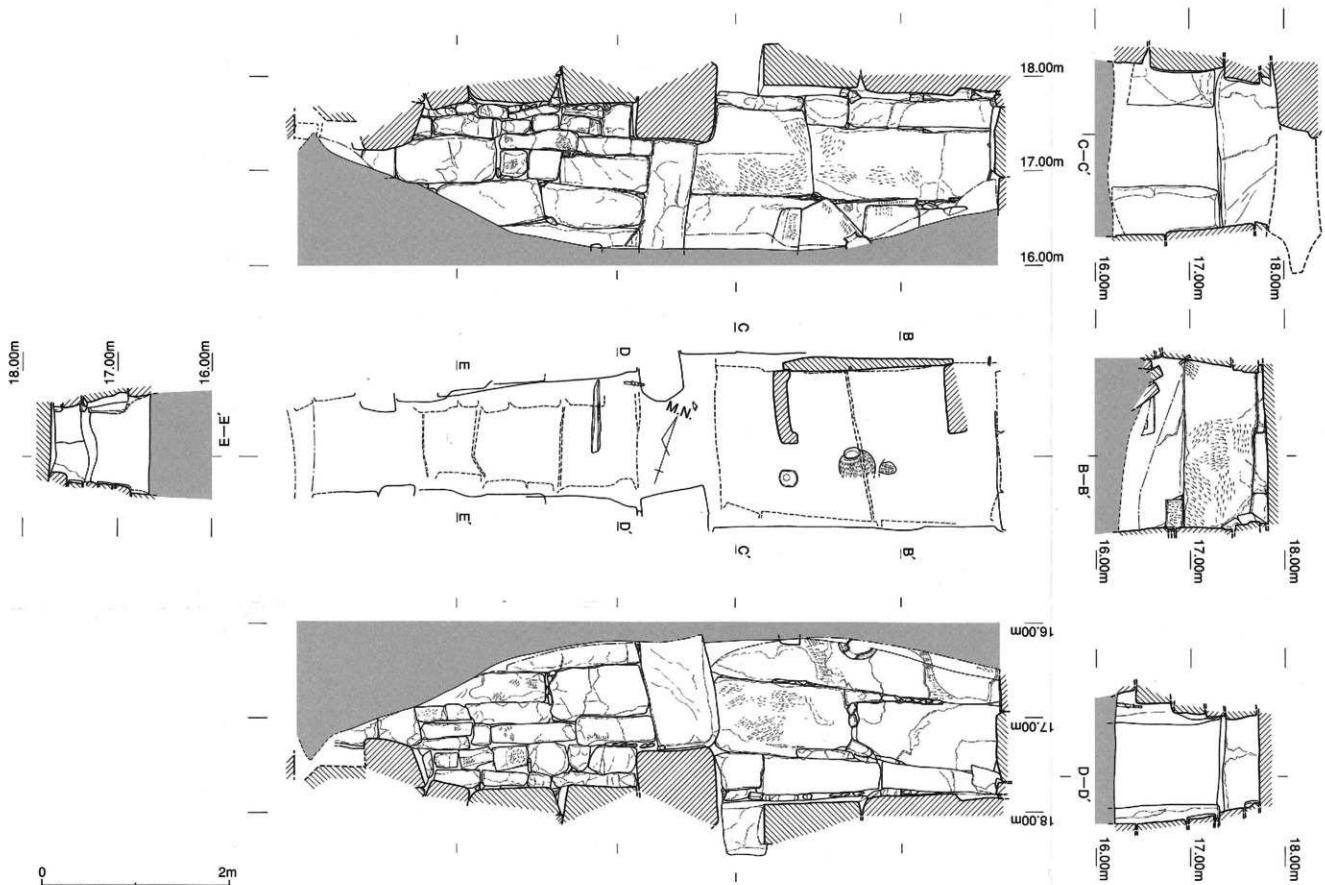


土層番号は、第5図に同じ

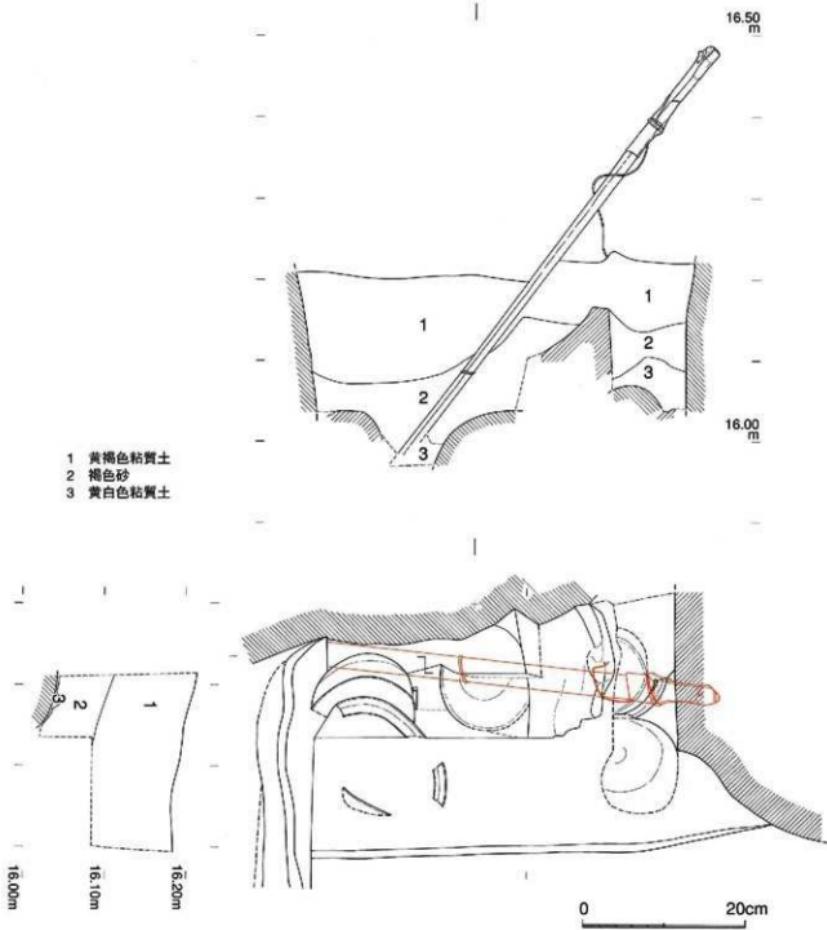
第6図 第3トレンチ、第4トレンチ、第5トレンチ 墓丘側土層図 (S=1/40)



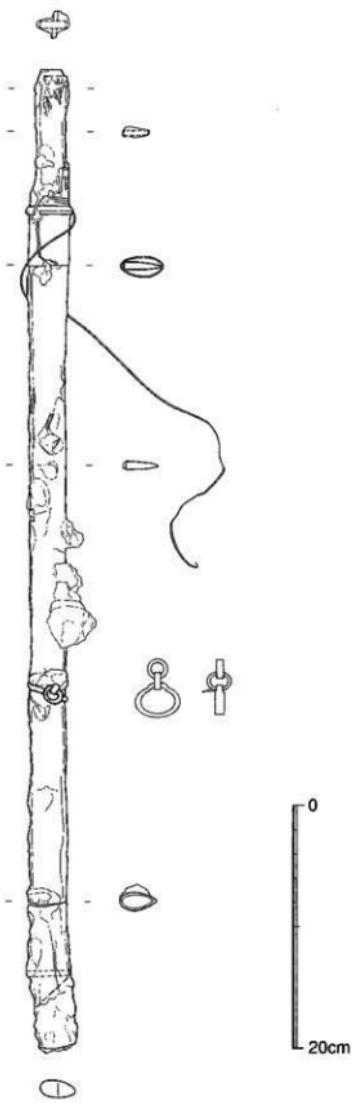
第7図 家形石棺と復元図 (1 / 40)



第8図 横穴式石室実測図 (S=1/40)



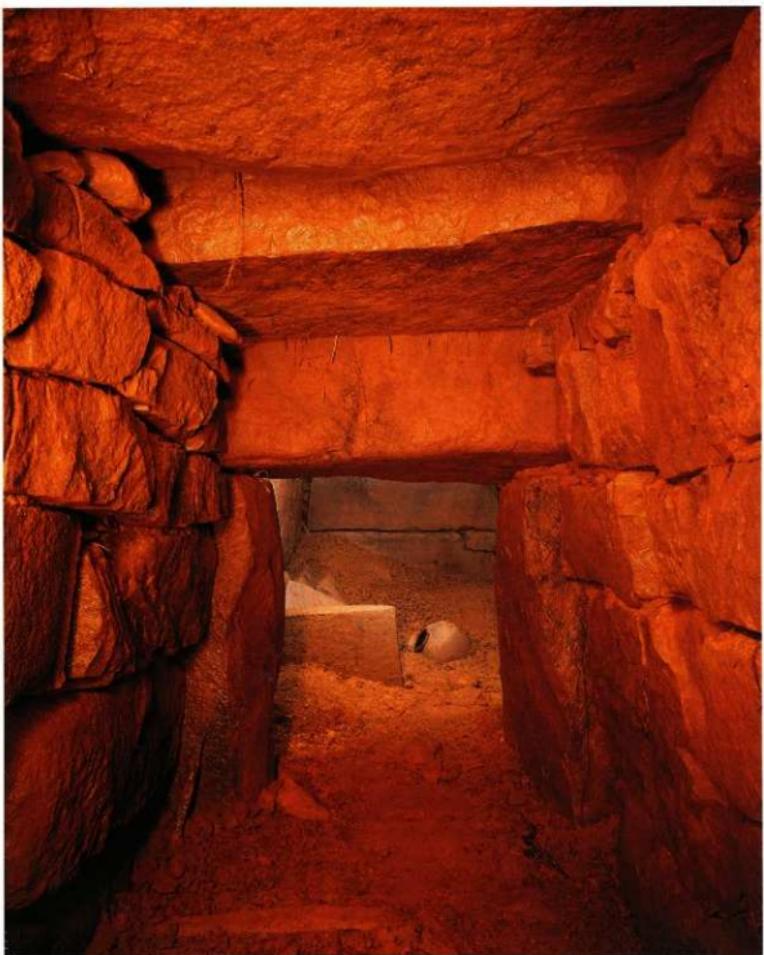
第9図 大刀出土状況図 (S=1/6)



第10図 大刀 実測図 (1/4)

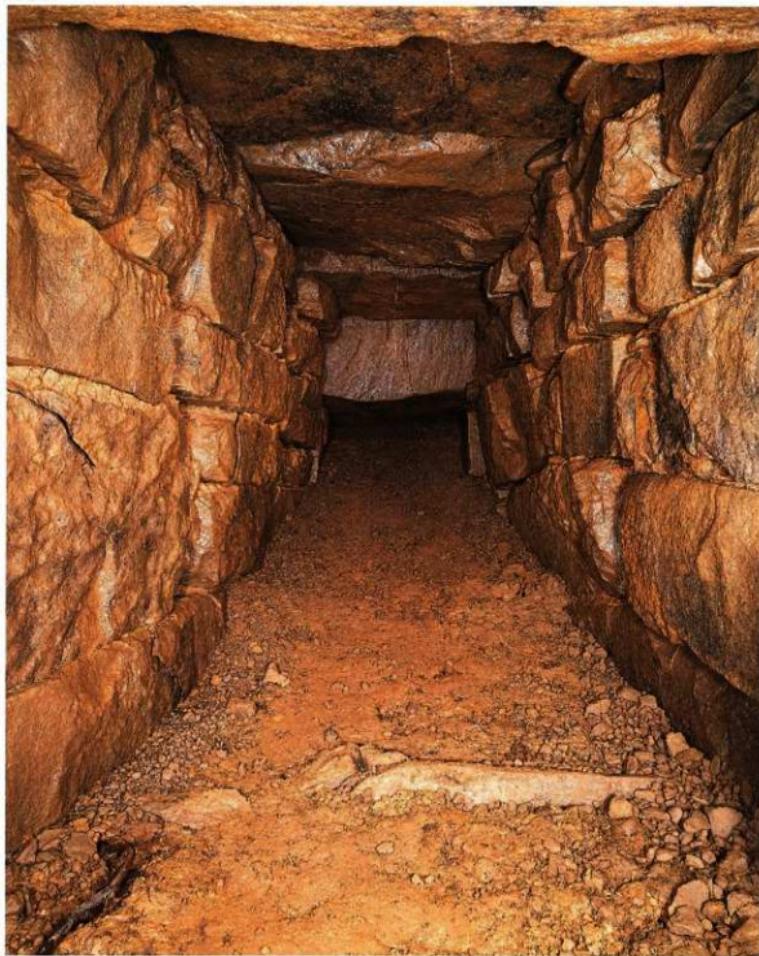
図版

図版1

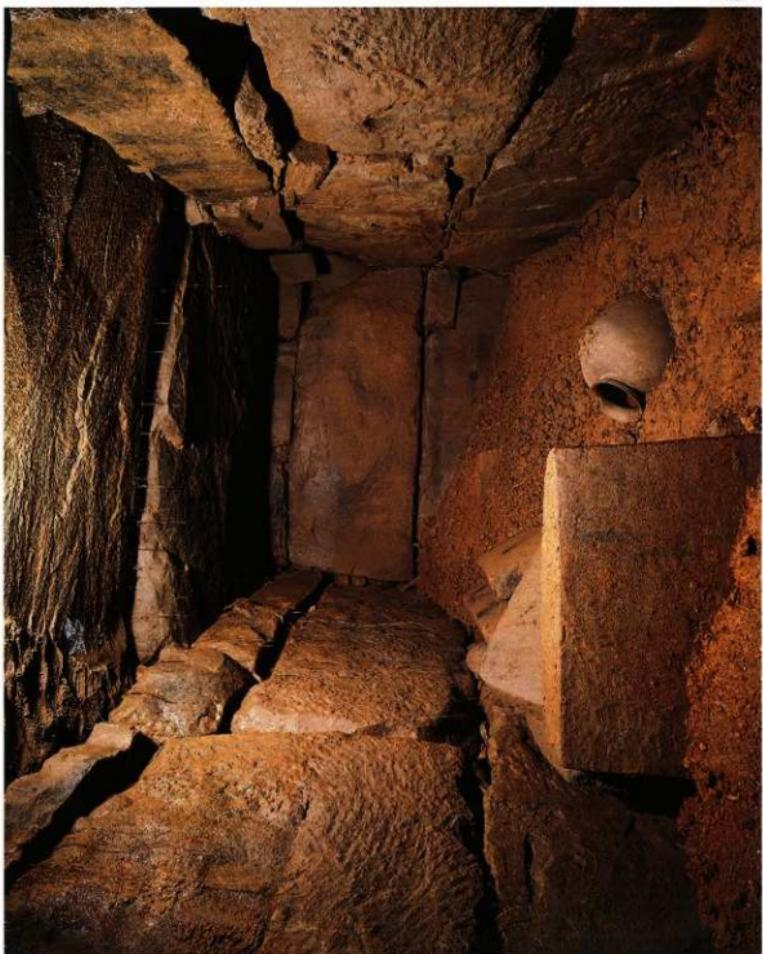


前室から玄門と玄室方向

図版 2

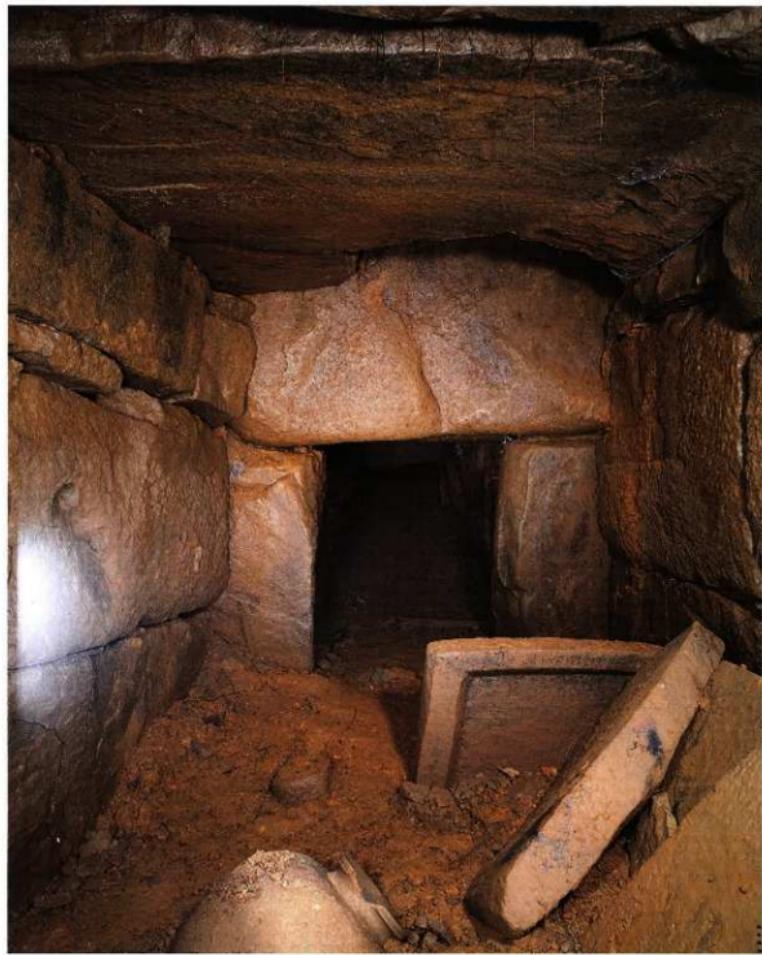


前室の玄門前から前門方向

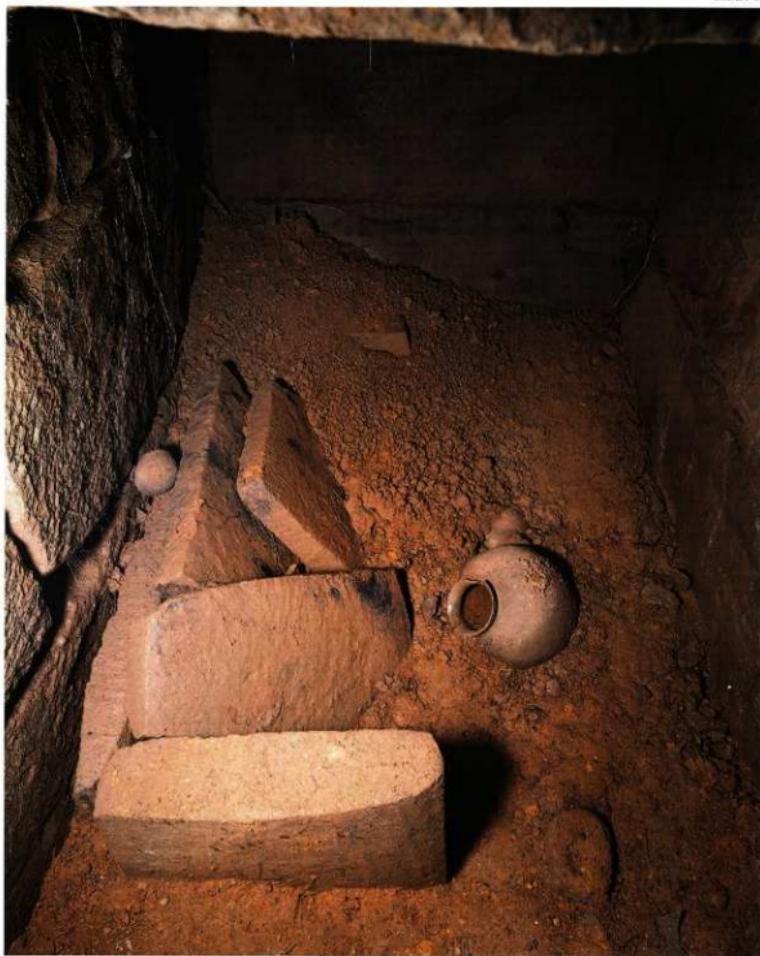


文室（馬室）

図版 4

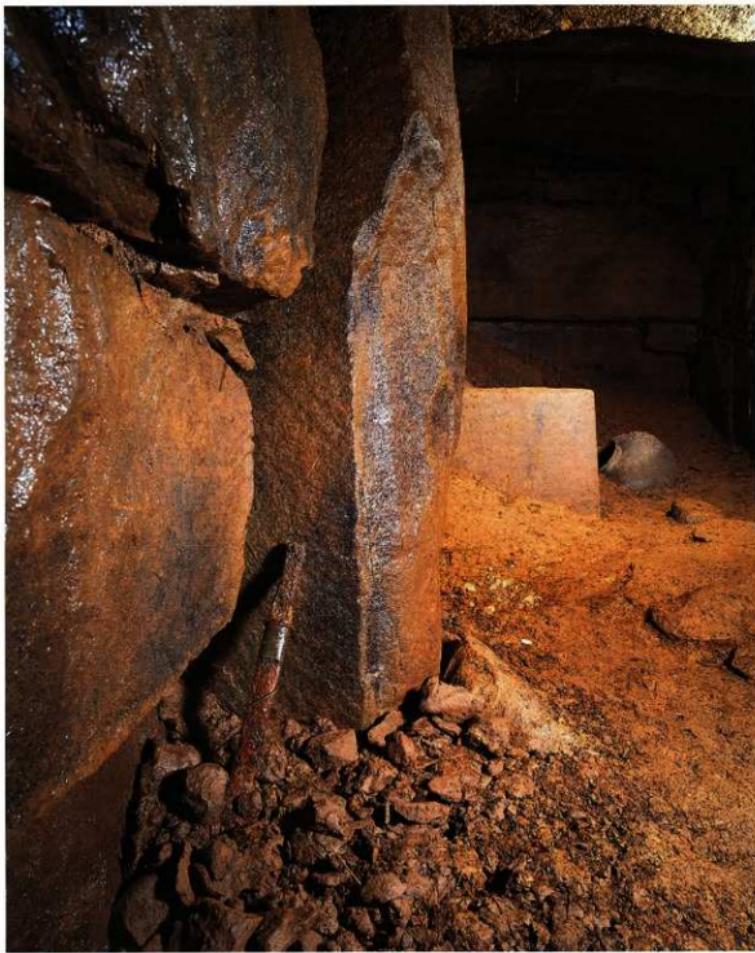


玄室（玄門）

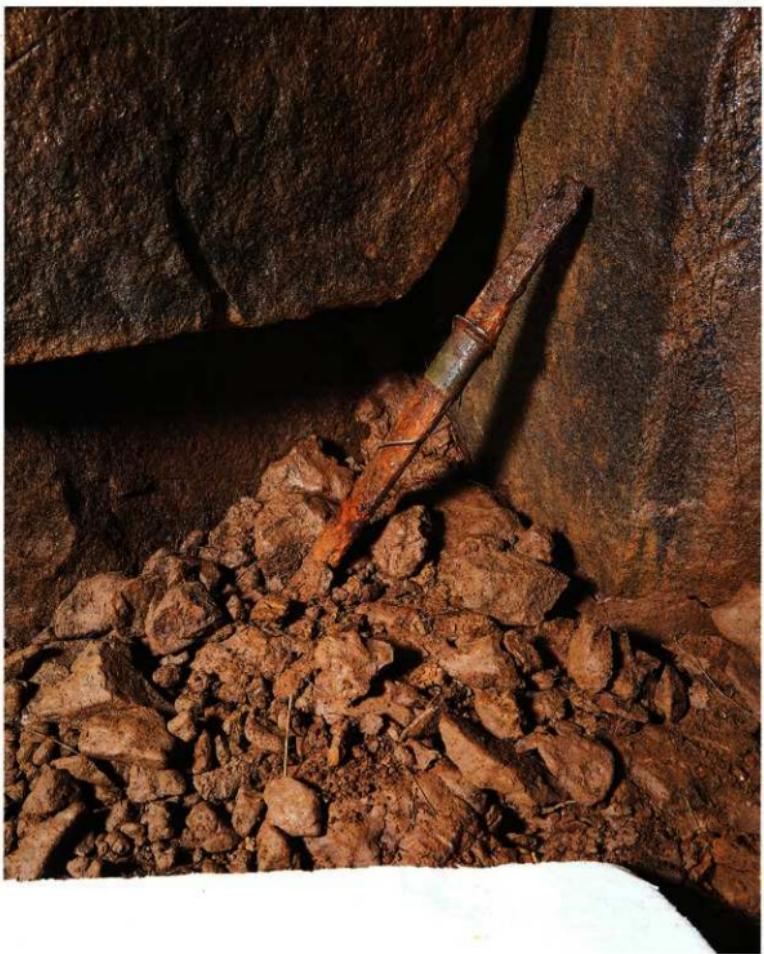


玄室（家形石棺と副葬品の状況）

図版 6

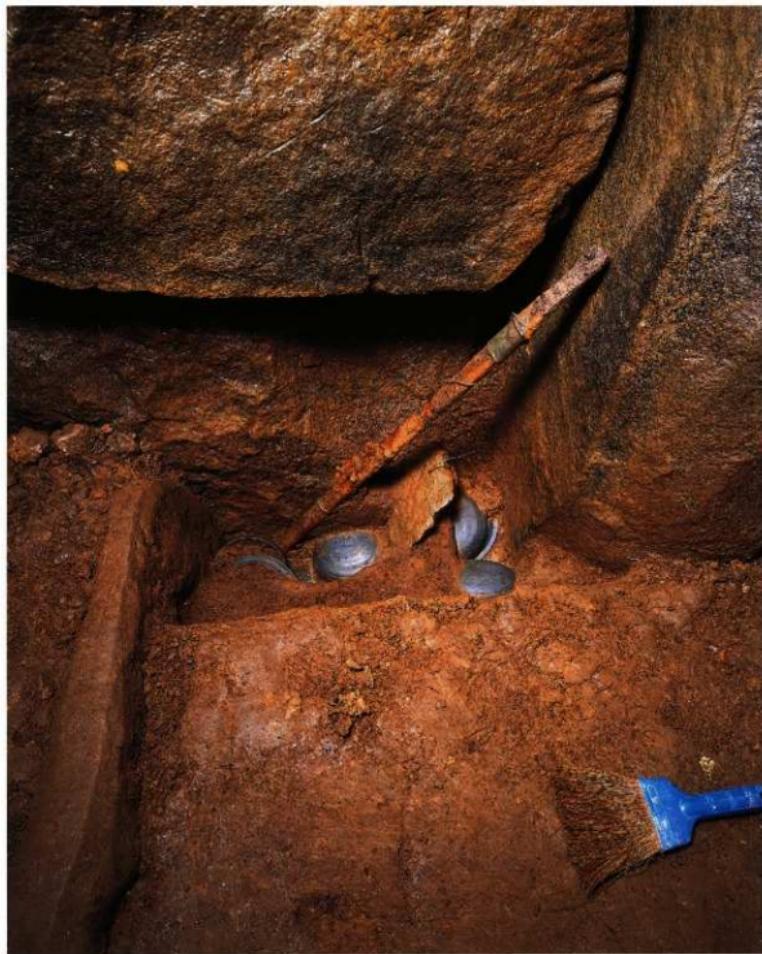


前室の大刀（調査前）



前室の大刀（調査前）

図版 8



前室の大刀（調査後）



図版10



1 古墳発見後2（北から）



2 古墳発見前3（北から）



3 古墳発見後3（北から）



1 古墳発見前4（東から）



2 古墳発見後5（南から）



3 天井石の一部

図版12



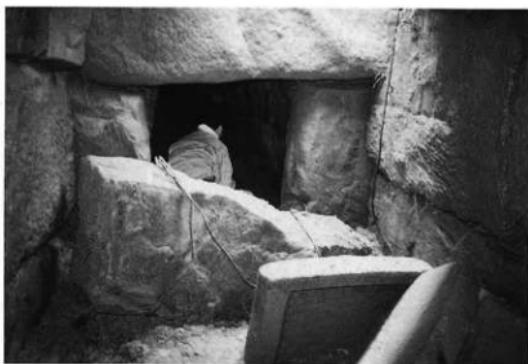
1 開口部1（南から）



2 開口部2（西から）



3 開口部3（東から）



1 玄室に落下した天井石の一部



2 落下した天井石の
吊り上げ作業の様子



3 落下した天井石

図版14



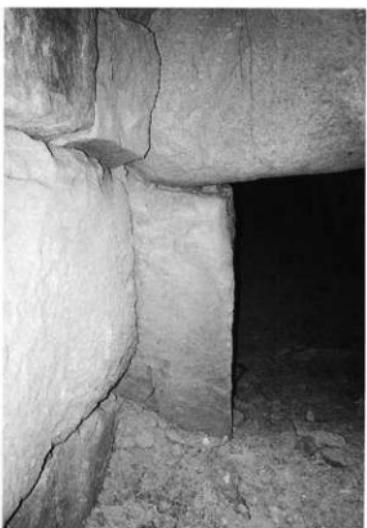
1 玄室（奥壁）



2 玄室（奥壁と左側壁）



3 玄室（奥壁と右側壁）



1 玄室（玄門と右側壁）

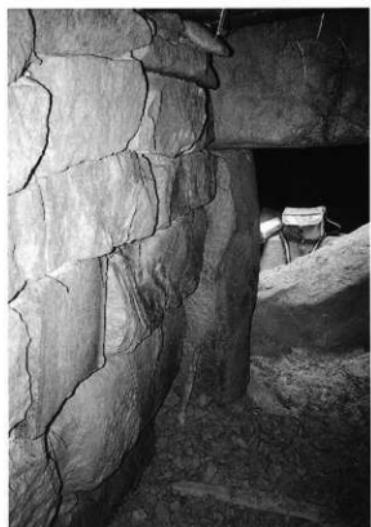


2 玄室（玄門と左側壁）



3 玄室（玄門と左側壁）

図版16



1 前室（玄門と左側壁）



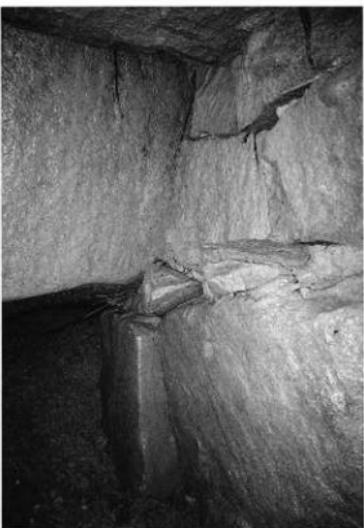
2 前室（玄門と右側壁）



3 前室（玄門と大刀と石障）



1 前室（前門と右側壁）



2 前室（前門と左側壁）



3 案道（案門の壠石）

図版18



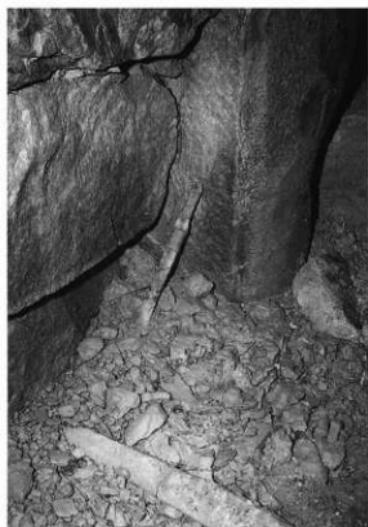
1 玄室（石棺前の壺）



2 玄室（石棺上の短頸壺）



3 玄室（大刀）



1 前室（調査前の大刀）

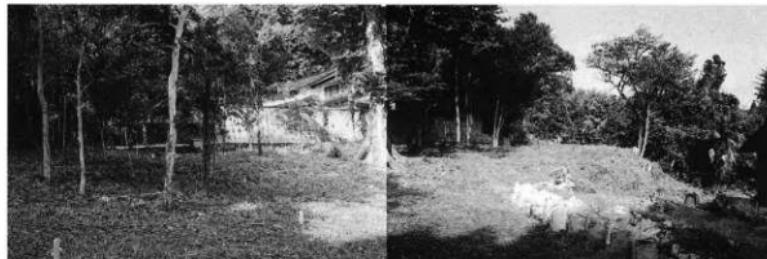


2 前室（調査後の大刀）



3 前室（調査後の大刀）

図版20



1 古墳墳丘（墳丘調査前の全景・東から）



2 古墳墳丘（墳丘調査前の境頂部・北から）



1 トレンチ設定状況
(石室入口付近・西から)



2 トレンチ設定状況 (南から)



3 トレンチ設定状況 (北から)

図版22



1 第1トレンチ（全体・東から）



2 第1トレンチ（西壁・東から）



3 第2トレンチ（全体・東から）



4 第2トレンチ（西壁・東から）



1 第3トレンチ（全体・南から）



2 第3トレンチ（北壁・南から）



3 第3トレンチ（西壁・東から）

図版24



1 第4トレンチ（全体・北西から）



2 第4トレンチ（南東壁・北西から）



3 第4トレンチ
（西南壁・北東から）



1 第5トレーンチ（全体・西から）



2 第5トレーンチ（北壁・南から）



3 第5トレーンチと第2トレーンチ（東から）



4 第5トレーンチと第2トレーンチ（西壁・東から）